

## インドから火星へ——スイス心理学の先達 (上)：フルルノワ

### サトウタツヤ

立命館大学文学部教授・研究部長。日本心理学会教育研究委員会資料保存小委員会委員長。この委員会の活動については2～3ページをご覧ください。フルルノワの著書『インドから火星へ』は最近、フランスで映画化されたようです (2007)。



T. フルルノワ (1854-1920)

スイスの心理学の創設者はフルルノワ (Théodore Flournoy) です。彼は、医学と哲学を修めた後、ドイツ・ライプツィヒ大学のザントのもとで当時の最新科学の一つであった心理学を学び、1891年にスイスで最初の実験心理学の教授になりました。『心理学アーカイブ』という心理学の専門雑誌も刊行しました (1901)。後に第6回国際心理学会をスイスで行った時の大会実行委員長にもなりました (1906)。

彼は霊媒にも関心をもっていて研究を重ね、1900年には一般読者を想定した著書『インドから火星へ：異言をともなう夢遊病の一症例に関する研究』を出版しました。この当時、ヨーロッパでは霊媒による交霊会が盛んに行われていました。フルルノワはスイスのエレヌ・スミス (本名は Catherine-Elise Müller) という霊媒の行為を分析し、著書にしたのです。エレヌは一種の夢遊病状態に陥り、大きく分けて三つの物語を語る人物になり得ていました。

まず、彼女は二人の人物の生まれ変わりだと主張していました。

最初はシヴルカ・ナヤカという名をもつ BC1400 年頃のインドの王子の妻として生き、その後は有名な 18 世紀のフランス王妃マリー＝アントワネットだったと主張しました。エレヌはこの二人の生まれ変わりであるから、その当時のインドやフランスのことを自身の体験として語る事ができました。その内容を誰がどのように評価するのかにもよりますが、多くの人を驚かせる内容だったようです。その上さらに、彼女は霊媒能力を用いて火星の人々と交信できると主張していました。

心理学者・フルルノワは、こうした霊媒能力を信じていたわけではなく、何が彼女をしてこのような物語を語らせるに至ったのか、ということ进行分析しようとした。エレヌは時にインドの言葉や火星の言葉を交えて語っていました。火星語と称する言葉のことはともかく、インドを訪れたこともなくサンスクリット語を勉強したこともない彼女の口からその言葉が出たことについて、周囲の人々は説明ができませんでした。



エレヌによる火星の文字 (と称するもの) の一部

フルルノワは緻密な分析の末、彼女のサンスクリットは、エレヌが幼児期の読書によって得た知識であると確信するに至ります。そして、自分では覚えていない、意識すらできない記憶があること、それを「潜在記憶 (Cryptomnesia)」と呼ぶことを提案したのです (なお、一連の交流会には、フルルノワの同僚だった言語学者ソシュールが参加していたことも興味をひきます。ソシュールはエレヌの用いた言語を分析していたようです)。これはフロイトの『夢判断』の発表と同時期です。

なお、スイス出身のユングは 1903 年に、「いわゆるオカルト現象の心理学と病理学」という論文で博士号を得ているのですが、フルルノワの本から影響を受けていると考えられます。ただし、彼は「潜在記憶」という現象を半夢遊症の状態における精神能力の異常なまでの増進という文脈で理解・記述しようとしていたようです。

近代心理学の揺籃期は、霊媒の活躍する時期と重なっていました。科学者たちはその力を霊的なものとして信じる者と、霊とは異なる何かによるものではないかと疑う者に分かれました (日本では東京帝大の心理学者・福来友吉が前者にあたります)。後者の人々の科学的分析は、人間のもつ自分では意識できない能力の大きさを示すことになり、神経症等の治療に役立つとともに、霊媒の活躍を奪っていくようになったのでした。